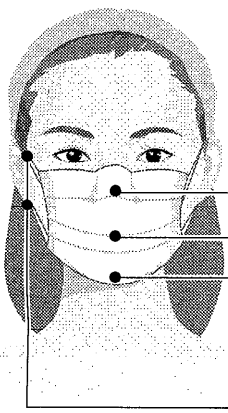




医療従事者用の特殊なマスク④と通常のマスク

マスクの正しい装着法
(サージカルマスクの場合)



- ①口と鼻の両方とも覆う
- ②鼻当てワイヤを曲げ、鼻にフィットさせる
- ③マスクをあごの下まで伸ばす
- ④ヒモを引っ張り、できるだけすき間ができないように調整する

(注)モレコーポレーション社の資料より作成

政府は今夏、新型用のワクチンの効果と安全性を確かめる研究に着手し、この結果を見て、希望する国民への接種を検討する。研究を担当する国立病院機構三重病院の庵原俊昭院長は「子どもに受けさせたい」という母親から電

発生すれば世界的な大流行が懸念される新型インフルエンザ。政府は水際対策をまとめたのに続き、希望する国民へのワクチン接種を検討しているが、感染症の専門家の中には「特効薬となる対策はない。過度な期待は禁物」という見方もある。未知なる脅威に備えるには、一人ひとりが各種の対策の効果と限界について、正しい知識を持つことが大切だ。

検証 新型インフル対策

ワクチン「過信は禁物」

話がある」と話しており、国民の期待は大きいようだ。だが専門家の間にはその効果をめぐって様々な意見があり、接種を望むかどうかは慎重に判断すべき問題といえる。
効果は未知数
まず知っておきたいのが、新型用ワクチンと通常のインフルエンザワクチンとの違いだ。
通常のもは現存するウイルスをもとに作っており、事前接種することで一定の効果が期待できる。これに対し、新型はウイルスがまだ出現していない。接種が検討されている「プレパンデミック(流行前)ワクチン」は、新型へ

接種判断 慎重に

の変異が懸念される鳥インフルエンザウイルスから作っており、どの程度の変異があるかによって、効果が大きく左右されるとみられる。
新型用はすでに国の承認審査を通っている。しかし「正直、どれくらい効くかは分からない」と話すのは、審査を担当した医薬品医療機器総合機構の鹿野真弓部長だ。
同機構によると、日本の新型用ワクチンは国際的な評価基準を満たしていない。独自の基準で承認したが、予防効果との関連は未知数だ。「現時点で少しでも期待できるのはこれだけ。まず何か出さないといけない」と(鹿野部長)との判断だったという。

重症化防げれば

予防接種はごくまれながら副作用のリスクが避けられない。けいゆう病院(横浜市)の菅谷憲夫部長は「現段階では、効果よりリスクの方が高い。流行の兆しがあるまで、国民全員に打つべきではない」と話す。
これに対し、接種に積極的な田代真人・国立感染症研究所部長は「新型の感染を防ぐワクチンは世界のどこにもない。あくまでも感染した場合の重症化を防ぎ、死亡率を抑えるのが狙い」として、必要性を強調する。
また三重病院の庵原院長は「下準備」としての意義に期待している。

マスクは感染症対策の基本だが、「マスクをしていれば新型インフルエンザはうつらない」というのは誤解だ。
北里大医学部の和田耕治助教(公衆衛生学)によると、マスクの効用は、すでに感染した人がせきやくしゃみで他人にうつさないようにすること。感染を予防する目的でつけていても、すき間からウイルスを吸い込む可能性があるという。
和田助教は「流行中はたとえマスクをしても、不要不急の外出は控えてほしい」と話す。

装着の仕方によっても効果に差が出る。マスクの輸入販売を手掛ける「モレコーポレーション」(東京・中野)の草場恒樹社長は「フィルタ

マスク正しく着用 自宅に買い置きを

が高性能でも、顔との間にすき間があれば効果は大きく下がる」と指摘。口だけでなく鼻も覆い、顔にフィットさせることが重要だ。
医療機関では、空気感染する

待し、「一度ワクチンを事前

に打っておけば、体がウイルスを記憶して、流行開始後に改めて接種したときに速やかに免疫がつくかもしれない」と指摘する。
流行前にワクチンを希望者全員に接種することを検討しているのは実は、世界でも日本だけで、欧米各国は総じて慎重な姿勢だ。念頭にあるのは、約三十年前の米国での出来事。豚インフルエンザの感染者が出た米国政府は、国民全員に予防接種する計画を進めたが、重い神経まひなどの副作用が相次ぎ、接種は中止。流行も起こらず、政府は批判にさらされた。
ワクチンの接種を希望するかどうかは個人の判断だが、いざいざにしても「接種しておけば安心」という過信は禁物。予防策の一つと認識し、ほかの手段も講じる必要があるといえる。

「タミフルで封じ込め」疑問も

推進など、社会活動を制限する方が有効なのに、肝心の議論が遅れている」と指摘する。
押谷教授は「日本はワクチンやタミフルに過剰に期待する傾向が強いが、『これさえあれば安心』という特効薬はない」と言い切る。
マスクや手洗い、社会活動の制限など、様々な手段を使って流行のピークを遅らせ、その間に確実に予防が望めるワクチンを作る。こうした正攻法で臨むべきだと、押谷教授は訴えている。

る病原体にも対応できる「N95」と呼ばれる特殊マスクも使われる。新型インフルエンザが発生した場合、患者と接する医師や看護師らはこのマスクを着用する。
候群(SARS)の発生時、ネットオークションで高値で売買されるなど混乱が起きており、和田助教は「N95マスクはあくまでも医療用。家庭では通常のマスクを使用することになる」と話す。
流行が始まれば、マスクは品薄の懸念もある。「季節商品のための在庫は少ないうえ、ほとんどが中国製の急な増産も困難」と日本衛生材料工業連合会の藤田直哉専務理事。ある程度の数を自宅に備えておいた方がよいようだ。
(倉辺洋介、古田彩、松田省吾)

医療